

# 大正自由教育の今日的可能性

川 井 陽 一

北里大学看護学部

市 毛 正 仁

神奈川県立総合教育センター

---

## 要旨

わが国の教育は、現在ひとつの転換期を迎えている。情報化はもとより、いわゆるグローバル社会の到来に伴うグローバル教育への期待、さらには文科省も積極的に後押ししているアクティブ・ラーニングの展開、そして大学入試に関する大きな改革等は、そのことを示す証左であり、そこから読みとれるのは、「画一、注入、受け身」ではなく、「多様性、自学、主体性」を重視する教育という流れであると思われる。

翻って、今日の教育の直接的な出発点を求めると、やはり第二次世界大戦後のいわゆる戦後の教育改革に行き着くはずである。教育基本法の制定、学校教育法の制定等により、個人の人格の完成を目的とし、また6・3・3制や男女共学等を制度的な柱にしなが、今日に至る戦後の教育は開始された。さらに、その後、主としては中教審の答申、加えて臨教審の答申等をベースに教育改革が進行した。その中で、今日につながる重要な答申となったのが「個性重視」を大きな柱に据えた臨教審答申であろう。個性重視、個性の伸長等は、その後の教育のキーワードとなっている感がある。

ところで、「画一、注入、受け身」ではなく、「多様性、自学、主体性」を重視する教育、「個性重視」という言葉が、実は、大正自由教育の中において窺えることに注目したい。また、今後に向けて重要性が高まっているグローバル教育の中でも、特に近年期待が増している国際バカロレアが目指す人間像を考える上でも、澤柳政太郎の手になる成城小学校の教育を含む大正自由教育を検証することは意味があると思われる。

本稿では、大正自由教育の考察をとおして、その今日的可能性を探ってみたい。

キーワード：大正自由教育、澤柳政太郎、成城小学校、小原國芳、ヘルバルト派教育学、  
全人教育、グローバル教育、国際バカロレア

---

## 1 はじめに

今日、わが国の教育がひとつの転換期を迎えていることは誰もが認めるところであると思われる。グローバル社会に伴うグローバル教育の推進、さらにアクティブ・ラーニングへの期待とその広がり、そしてまた記述式を取り入れた大学入試に向けての検討も転換期という位置づけの中に置くことができよう。

ところで、今日の教育を考えるにあたり、その直接的な出発点は、第二次世界大戦後のいわゆる戦後の教育改革に遡るといえるのは異論のないところであると思われる。アメリカ教育使節団の報告書、日本国憲法の制定、教育基本法の制定及び学校教育法の制定等を土台に戦後の教育改革は進行した。

戦後の教育改革は、別名「第二の教育改革」とも呼ばれているが、その後、1971年（昭和46年）の中教審答申いわゆる「四六答申」において、「第三の教育改革」が打ち出され、さらに1984年から87年にかけての臨時教育審議会においては、個性重視の原則、生涯学習社会への移行、変化への対応という、まさに今日の教育につながる考え方が提示されることとなった。とりわけ、臨教審の答申に盛り込まれた「個性重視」という考え方は、その後の教育におけるキーワードとも呼ぶべきものであり、その影響は今日に及んでいる。

このように見てくると、「個性重視」は、戦後70年の教育の歴史の中でも比較的新しく登場してきた言葉であり、なおかつ教育の新たな路線につながる言葉と捉えられてよいであろう。もとより、「個性重視」すなわち子どもの個性の伸長を目指す教育の立場は、「個性」をどのようにとらえるかについては、ここではひとまず措くとして、「子ども主体」という子ども観との関連を考えても、今日の教育においてはもとより、今後の教育においても重視されるべきものと思われる。

確かに、「個性重視」は戦後の教育の流れの中では比較的新しく登場してきた言葉であり、近年の教育の流れの中に位置づけられる言葉と考えるとよいはずである。一方、明治以来のわが国の長い近代教育史を繙けば、ほぼ同じ考え方が提示された時期が存在している。それは言うまでもなく大正自由教育の時代である。

その時代において最も重要な役割を果たした人物に澤柳政太郎がいる。澤柳は、文部次官、第一高等学校長、東北帝国大学総長、京都帝国大学総長等を歴任し、その間、行政官としてはわが国の教育の整備に、教育者としてはすぐれた理論と実践に類稀な手腕を発揮した。その後、彼は、1917年（大正6年）創立の成城小学校の初代校長をつとめているが、成城小学校において彼が重視した教育の柱のひとつが「個性尊重」であったことはつとに知られている。

澤柳の教育論、教師論は、今日的に見ても極めて注目すべき内容を含んでおり、澤柳が先導した大正自由教育に光を当てることは、今後のわが国の教育を考える上でも十分に意味があると思われる。

本稿では、大正自由教育について史的考察を試み、その上で、その今日的可能性を探ってみたい。

## 2 ヘルバルト派教育学の隆盛と限界

大正自由教育についての検討に入る前に、明治期におけるヘルバルト派教育学の流行にふれておきたい。というのも、大正自由教育は、ヘルバルト派教育学との対比の中で、その内容がより浮かび上がってくるからである。

教授法に関し、重要な役割を果たした人物にヘルバルトがいることは周知のとおりである<sup>1</sup>。ヘルバルトは、教授の段階を「明瞭 連合 系統 方法」の四段階に区分し、さらに彼の後継者であるラインにより、「予備（学習の動機付け） 提示（新しい教材の提示） 比較（新しい知識と既得の知識との比較） 総括（新しい知識の体系化） 応用（新しい知識を活用し定着を図る）」の五段階教授法が確立されることになる。そして、この五段階教授法は、授業をわかりやすくパターン化する方法として、1890年ごろから多くの国々で受け入れられるようになっていったが、わが国もその例にもれなかった<sup>2</sup>。

「ヘルバルト派教育学は、前述のように、教育実際界には五段階教授法という形で普及されたのであるが、明治二五年頃から、三五、六年頃までの教育界は「明けても暮れてもヘルバルト一天張り」（『千葉師範学校沿革史』二五三頁）という状景を呈した」<sup>3</sup>。

「明けても暮れてもヘルバルト一天張り」という表現から当時における五段階教授法の隆盛ぶりを窺うことができよう。さらに同書では、修身科における五段階教授法の例として、山梨師範学校における「二宮金次郎の立身」の教案を示した上で、以下のように結論づけている。

「このようにヘルバルト派教育学は、主に五段階教授法を内容とする教授法の学として受け容れられ、あらゆる教科、あらゆる教授が、論理的に整然と五段階に分けられる結果を招来した。それは未だ教育技術に習熟していなかった当時の大多数の教師達に一つの公式を与え、教授のわくをつくるものとして、教師たちの実際的な要求に完全に一致したのである。しかし、その反面すべての教科の教授が機械化され、形式化される悪い傾向を作り出し、特に修身教授における演出的な五段階教授法は、日本人の偽善的パーソナリティを形成する上に大きく働いたのである。」<sup>4</sup>

この点に関して、同趣旨の指摘をもうひとつあげておきたい。

「1887年にハウスクネヒト（E.Hausknecht）によって本格的な紹介がなされて以来、それが道徳的品性の陶冶を教育の目的とし、しかもその五段階教授法が理論的に整備されていたこともあって、勅語の精神を浸透されるうえできわめて有効であるとされ、全国各地に広く普及した。

しかし、日本で実際に展開されたヘルバルト教育学は、本来の趣旨から離れて、教育の

目的を教育勅語の徳目や儒教の五倫五常に置き換えて、これを五段階教授法によって注入していくという形式的なものとなった。」<sup>5</sup>。

こうした叙述からも明らかなように、当時わが国で展開されていたヘルバルト派教育学は、とりわけ「形式化」「注入主義」といった点において大きな課題が生じていた<sup>6</sup>。

そのような中で、欧米の新教育運動の影響を受け、わが国にも大正自由教育運動が起こっていくが、その大正自由教育に影響を与える動きが明治期に生じている。樋口勘次郎や谷本富の主張がそれである<sup>7</sup>。

二人はヘルバルト派教育学を批判した点において共通しており、生徒が自ら学ぶことの重要性を指摘した点も共通している。

### 3 大正自由教育の先駆け

明治時代の末期、大正自由教育の先駆けとも呼ぶべき注目すべき学校が誕生する。ひとつは日本済美学校であり、もうひとつは成蹊実務学校である。

1907年（明治40年）創立の日本済美学校、1912年（明治45年）創立の成蹊実務学校は、いずれも、欧米における新教育運動の萌芽と呼ばれる新しい学校改革運動の動き、すなわち、フランスのドラモンやドイツのリーツなどによって企てられた学校改革に範をとっている。たとえば、以下の説明はその例証となろう。

「『楽しい家』の教育はこのように当時のヒューマニストの進歩的な教育思想を地で行ったものということができよう。それは、中世的修道院風の、あるいは封建的権威主義による抑圧主義的な教育に対比して、全く近代的で、明るく、人間主義的である。それはまさに子供たちの楽園というにふさわしいものであり、例えば十九世紀末から二十世紀初めにかけてフランスのドラモンやドイツのリーツがさきがけて試みたもの、ドイツでは、ラント・エルチーフングス・ハイム（田園教育舎）と呼ばれたもの、それを範として日本でも今井恒郎によって東京郊外の和田堀に設けられた日本済美学校や中村春二によって創立された成蹊実務学校の教育とほとんど同じ趣のものである。これらの田園教育舎型の新学校は十九世紀末から二十世紀初期の社会においても全く新奇で卓抜で、革新的なものとして世間に受け取られたものであるが、ヴィットリーノはそれより五〇〇年前に、これらとほとんどそっくりそのままの新学校を創造していたのである。」<sup>8</sup>

ヴィットリーノは15世紀に活躍したイタリアの教育家であり、同時代に活躍した同じくイタリアの教育家グアリーノと共に、知、徳、体の調和的発達を目指すヒューマニズム教育を樹立した人物として西洋教育史上名高い人物である。ヒューマニズム教育の目指したものの、言い換えればヴィットリーノやグアリーノの目指したものは、ギリシア・ローマの古典を重視しながら知、徳、体の調和的発達を目指す全人教育であった<sup>9</sup>。

上記引用文にある「楽しい家」は、ヴィットリーノが、マントヴァ侯ゴンザガの招聘に

より、マントヴァの地に開いた学校である。15世紀前半につくられた「ジョコーサ (La Giocosa)」(「楽しい家」)が、19世紀末から20世紀初めのドラモンやリーツの学校につながり、その影響のもとに今井恒郎による日本済美学校や中村春二による成蹊実務学校がつくられたことは誠に興味深いものがある。

ここで、中村春二の教育の実際をみてみたい。「ご承知のように成蹊学園は、中村春二が一九一二年(明治四十五年)年に「成蹊実務学校」を創り、つづいて中学校、小学校をつくって総合学園となりました。」<sup>10</sup>

この文章を書いているのは、大正自由教育研究の泰斗中野光である。中野は、成蹊の教育の特色について以下のように綴っている。

「入学の初日から記念樹を植えるという形で子どもたちにシャベルをもたせ、土をいじらせる、これがずっと発展し園芸や飼育で土に親しませる、自然に親しませる、作業を通して教育をするというのが、——中学校、実務学校でもそうですけれども——このことが成蹊の一つの大きな特色になっています。」<sup>11</sup>

そして、以下のように結論づけている。

「その実践は、日本の新学校の原像をつくった、といえましょう。単に成蹊小学校だけでなく、日本に“もうひとつの学校”があることを実践的に示した、と言ってもよいものでした。ですから、当時「新しい学校を知りたかったら、まず成蹊に行きなさい」ということで、成蹊が一つの学校改革運動 (movement) のメッカになったのではないかと想像しております。」<sup>12</sup>

中野が、「中村春二は明治以降の公教育、つまり国家主導の画一的な教育では、失われたものがたくさんあるということに早くから気づいていた思想家であり、教育者でありました。」<sup>13</sup>と言及した上で指摘している以下の文章も興味深いものがある。

「成蹊学園の教育が子どもの個性を尊重することを目指す以上、知識の詰め込み主義にならないような条件をつくっていかねばならない、と考えました。そして、中村春二が「自奮自励」という言葉を使ったことは期せずしてペスタロッチの主張“Hilfe zur Selbsthilfe”＝“自助への助け”にも通じた原理でした。」<sup>14</sup>

成蹊小学校が、当時の日本における“もうひとつの学校”であり、そこにおいては個性の尊重に加え、子どもたちの自発性が奨励されていたことは注目してよいことと思われる。併せて大正自由教育の先駆けとして成蹊小学校の果たした役割も心に留めたい点である。

#### 4 澤柳政太郎の果たした役割

わが国におけるヘルバルト派教育学の隆盛とその克服、さらに中村春二の教育実践等から、旧来の画一性、形式主義、注入主義から脱して、生徒の自発性の重視や、個性の尊重に関心が向けられる、そのような動きがみられるようになったことは既述のとおりである。

一方、世界に目を向けると、第一次世界大戦後の国際的な平和希求の動き、あるいは自由主義、民主主義的な風潮の中で、欧米を中心に新教育運動が広がりをみせていった。エレン＝ケイ、ドラモン、リーツ、デューイ等の名前とも結びついた欧米の新教育運動はわが国にも及び、いわゆる大正自由教育とよばれる教育実践を生むことになった。

大正自由教育は、1921年（大正10年）に開催された「八大教育主張講演会」に代表されるように様々な主張及び実践を生んだが、立場や角度は異なれど、いずれも子どもの自主性を尊重する自由教育であるところに共通性がある。

本稿では、大正自由教育において最も注目すべき役割を果たした澤柳政太郎についてまずふれてみたい。

澤柳政太郎（1865－1927）は、周知のとおり、わが国の近代教育史に偉大な足跡を記した人物である。教育行政においては、文部省において文部次官等の要職を務め、種々の政策の遂行にあたり、一方、群馬県尋常中学校長、第一高等学校長、東北帝国大学総長、京都帝国大学総長等を歴任し、それぞれの学校で教育活動の充実に尽力したことはつとに知られている。教育行政、国公立の校長等としてのいわば前半生における活躍に加え、その後における彼の果たした役割については、以下の点を指摘しておきたい。

「後半生では、帝国教育会会長に就任、1917（大正6）年、成城小学校を設立し、校長として、教育の実践的問題の実験研究を指導し、日本の新教育運動のオピニオンリーダーとして、民間在野にあって日本の教育界にかなりの影響を与えた。澤柳の多彩な活動を反映して、非常に多数の教育関係の著書論文が出版され、多くの人々に読まれてきた。明治後半期に、訳書や著書が多く、大正期には、雑誌論文が多い。澤柳の教育学は処女作『公私学校比較編』（同文館、1890年）以来、約20年の蓄積が結実した『実際的教育学』（同文館 1909年）をもって、その体系化がなされたとされる。その理論の実践は日本の新教育運動にリンクしながら、成城小学校という場を得て、全国に注目されたのである。晩年には、世界国際教育会議等、数回の海外視察を通じて、教育の国際交流にも貢献した。」<sup>15</sup>

上記の文章から、国内のみならず、国際交流も含め、教育界において幅広く貢献した澤柳政太郎の活躍ぶりを窺うことができよう。中でも、「その理論の実践は日本の新教育運動にリンクしながら、成城小学校という場を得て、全国的に注目されたのである。」という箇所注目したい<sup>16</sup>。

## 5 澤柳政太郎と成城小学校

わが国の教育史を記した本には、1917年（大正6）年に成城小学校が設立され、澤柳政太郎が校長として着任したこと、さらに成城小学校の教育方針として、「個性尊重の教育」、「自然と親しむ教育」、「心情の教育」、「科学的研究を基とする教育」という4つの方針が掲げられたことが記されている。

成城小学校におけるこれら4つの教育方針からは、教育における今日的意義が感じられるのみならず、今後の教育においても重視されるべき考え方を窺うことができよう。まさにそのような意義を有し、大正自由教育の中においても重要な役割を果たした成城小学校の教育に入る前に、澤柳政太郎について二つの点を指摘しておきたい。

ひとつは彼が自らの人生において小学校の校長であることを誇りにするとともに小学校教育の重要性を大事に考えていたこと、もうひとつはペスタロッチと澤柳との関わりについてである。

まず前者については、成城小学校十周年記念の祝賀会でのエピソードを記したい。

「何か講演でもする時に、私を紹介する人が、前の文部次官だとか、大学総長だとか、帝国教育会長などというが、私はその紹介は不平である。今日、私は成城小学校長であり、それを榮譽とし、これを会心のこととし、力を入れている。それをいわずに前に述べた職などいわれるのは不満である。」<sup>17</sup>

前者については、次の点も補足しておきたい。それは、一時的に衰亡しかけていたと言われる成城学校からの校長就任要請に対する澤柳の姿勢についてである。「澤柳は成城学校からの申し出を条件付きで受け入れた。条件とは、この学校に新たに私立の小学校を付置し、そこを自分が主宰する実験校として認めてくれるならばという事であった。」<sup>18</sup>

後者について、まず注目したいのは次の点である。「ペスタロッチという人物の全体像と、教育者としての歴史的役割を日本で紹介した最初の人でもありました。」<sup>19</sup>

何より、澤柳にとっての成城小学校は、以下のような意味をもっていたのである。「成城小の創設こそが、澤柳の生涯の悲願であった。そして、その新教育の旗印は、官学の画一教育、進学準備教育、詰め込み主義、形式主義への反旗であった。」<sup>20</sup>

澤柳は、ペスタロッチの紹介者としての役割を果たしただけではなかった。ペスタロッチが著書『リーンハルトとゲルトルート』で「まったく新しい学校を」を創らねばならないと述べた故事にちなみ、成城小学校の校長として、ペスタロッチを踏まえた人事や人材育成に当たり、ペスタロッチの理念を生かした学校づくりを目指したとされている<sup>21</sup>。

「成城小学校校長としての澤柳の課題は「新しい学校」のあり方を求める研究学校を創ることにあったのでした。だからこそ、ペスタロッチ研究者である小西重直や長田新を顧問にし、ペスタロッチの信奉者といわれた小原國芳や赤井米吉を学園の実践的リーダーとし、一教師の森徳治をドイツ・マールブルグ大学へペスタロッチ研究のために留学させたのでした。成城小学校長としての澤柳は、大正期日本におけるペスタロッチ研究のもっとも有力なサポーターとしての役割を果たしたのでした。」<sup>22</sup>

こうした澤柳の小学校教育にかける思い、さらには彼の確固たる教育理念を背景に成城小学校の教育活動が展開されていった。中でも「個性の尊重」を含む上記の4つの教育方針は、今日にも通用するいわば普遍的な教育原理とも言うべきものであり、その先見性は高く評価されるべきであろう。同時に、研究と実践を積み重ねながら、研究校、実験校と

して成城小学校が果たした役割も高く評価されるべきであろう<sup>23</sup>。

研究校、実験校としての役割に関し、澤柳は成城小学校において、ダルトン・プランを採用し、子どもの主体性、自発性を重視する教育を展開している。澤柳は、彼の下で教師として活躍した赤井米吉の助力も得ながら、ダルトン・プランを十分に研究した上で成城小学校への導入を行っている<sup>24</sup>。4つの教育方針のみならず、新たな教育法であるダルトン・プランの導入にも澤柳の先見性をみることができる。加えて、注目したいのは、導入に当たっての拙速を戒める澤柳の進め方である。ともすれば、十分な準備なしに矢継ぎ早の改革が導入されがちな昨今の動きに鑑み、澤柳の姿勢、即ち、研究を積み、十分に咀嚼し、準備を重ねた上で新たな方法を取り入れるという姿勢は、今日さらには今後の教育を考える上で大いに参考にすべき点ではないだろうか。

## 6 澤柳政太郎の後継者たち—赤井米吉と小原國芳—

5においても触れたように、成城小学校において校長である澤柳の下、教師として活躍した人物に赤井米吉と小原國芳がいる。

赤井米吉が澤柳を支えたことについては5に記したとおりであるが、小原もまた成城小学校創立の初期に主事兼訓導として澤柳を大いに支えていた<sup>25</sup>。さらに、周知のとおり、赤井米吉は、1924年（大正13年）に「明星学園」を創設し、小原國芳は1929年（昭和4年）に玉川学園を創設している。

赤井米吉の設立した明星学園に関しては、“Life Study”にふれておきたい。明星学園創設時、赤井米吉とともに教育活動に従事した人物に照井猪一郎がいる。中野光によれば、照井は、大正時代から昭和の初めにかけて、“Life Study”「いのちの研究」「生活研究」という教科あるいはカリキュラムの領域が必要だと主張し、実践していた<sup>26</sup>。また、赤井自身も、“Life Study”、あるいは子どもの人間発達における“Environment”「環境」、自然との関係を含めて環境学習が重要だということを国際的にも提唱していた<sup>27</sup>。

わが国において、1989年（平成元年）の学習指導要領改訂で「生活科」が導入されたことは記憶に新しい。明星学園において、それよりもはるかに早く、しかも充実した取組が行われていたことは、環境学習の重要性を創設期から提唱していたことと併せ注目されてよいことと思われる。

澤柳政太郎の後継者としての赤井米吉については、上記の「生活研究」「環境学習」とも関連して、明星学園における「教育」と「研究」双方への意欲的な取組にも注目する必要がある。澤柳が日頃から求めていた「「教育」と「研究」双方に取り組む学校」、「教師であると同時に研究者たれ」という、いわゆる澤柳精神を赤井は忠実に受け継いでいる<sup>28</sup>。

小原國芳については、玉川学園の創設者であると同時に、「八大教育主張講演会」における彼の主張でもある「全人教育」を根本に据え教育活動を展開した人物として普く知られ



ている。

「全人教育」については、小原自身が、「全人とは完全人格すなわち調和ある人格の意味です。」<sup>29</sup>と述べるように、「調和ある人格」を養成することにある。加えて、小原は、教育の理想について、以下のように述べている。「さて、人間文化には六方面があると思います。すなわち、学問、道徳、芸術、宗教、身体、生活の六方面。学問の理想は真であり、道徳の理想は善であり、芸術の理想は美であり、宗教の理想は聖であり、身体の理想は健であり、生活の理想は富であります。教育の理想はすなわち、真、善、美、聖、健、富の六つの価値を創造することだと思います。」<sup>30</sup>この言葉から、全人教育、関連して彼の目指す教育の理想を読み取ることができよう。

また、彼は、労作教育を重視したことで知られている。「ペスタロッチが身を以って強調した通り、実に教育の根本は労作教育にあります。額に汗を流し、労しむことは万人の喜びであり、誇りであり、義務だと思います。「作」は「作業」の作ではなく、「創作」の作なのです。合せて「労作」と名づけたのです。」<sup>31</sup>この言葉からも彼の教育の理想が窺えると同時に、彼がペスタロッチに大いなる敬意を抱いていることが併せて窺えるのである。

次に澤柳政太郎の後継者としての小原國芳についてふれておきたい。

この点については、まず玉川教育信条に澤柳の成城小学校における教育信条が影響を与えていることがあげられる。付け加えれば、小原の以下の言葉からは、成城小学校と玉川学園の教育のつながり、また澤柳の後継者としての自負を窺うことができる。「少なくとも、初代の成城教育と玉川四十余年の教育には自信が持てる。宗教教育、道徳教育、労作教育、音楽教育、特に音楽教育のありがたさ—全人教育の尊（とうと）さを痛感する。ペスタロッチが“書き方学校はある、つづり方学校はある、ハイデルベルヒ学校はある、しかし人間学校はない”といった気持ちを肝に銘じて努力したつもりだ」<sup>32</sup>

赤井米吉、小原國芳の教育理念、教育実践からは、両人が成城において澤柳政太郎の下で培ったものを受け継ぎ、自らの教育活動、学校経営に取り入れていることが十分に窺えるのである。

## 7 大正自由教育とグローバル教育

大正自由教育の先駆けとしての今井恒郎の日本済美学校や中村春二の成蹊実務学校、さらに大正自由教育の精華である澤柳政太郎の成城小学校に代表される新学校の設立に見られるように、当時の学校教育を牽引したのは、傑出した個人によるところが大きかった。しかしながら、戦後の「第二の教育改革」、高度経済成長期を挟んだ「第三の教育改革」を経て、学校教育の量的拡大によるところが大きいの、現在の日本の教育界を牽引しているのは最早、個人ではありえず、政府や文部科学省を中心とした組織がフロンティア

の役を担っている。そして昨今、とみにクローズアップされてきた視点にグローバル教育がある。

コンピューターの発明・発達による大量・同時的な情報処理、インターネットによる国境を越えた通信や、航空機の発達による短時間での大量輸送が可能になると、ヒト・モノ・カネの流通は指数関数的に増大し、経済や社会、科学などの様々な分野で「グローバル化」が叫ばれて久しい。平成23年には「成長戦略実行計画（改革工程表）」、「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」などが矢継ぎ早に公表され、次期学習指導要領の改訂（平成28年度内に中教審答申予定）も視野に入ってきて、教育におけるグローバル化への歩みが加速されてきた。大正自由教育の視線の先にあるものは実社会であり、世界という存在は余りに遠く、視野に入れるにはあまりにも大きすぎたと言えよう。一方、今日のグローバル教育は、世界を意識し、子どもの活躍のフィールドとして国際舞台を視野に入れている。そこで求められる「グローバル人材」の要件は、「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」によれば次に示すとおりである。

- 要素Ⅰ：語学力、コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

初等・中等教育におけるグローバル人材育成の具体的施策の一つとして、文部科学省は国際的に認められる大学入学資格が取得できる国際バカロレア（International Baccalaureate=IB）プログラムを位置づけており、平成28年度までに200校を、IBレベルの教育を実施する学校として認定しようとしている。因みに、IB教育の理念を具体化した「IBの学習者像」(The IB Learner Profile)は次のとおりである。

- ①探求する人 ②知識のある人 ③考える人 ④コミュニケーションができる人 ⑤信念を持つ人 ⑥心を開く人 ⑦思いやりのある人 ⑧挑戦する人 ⑨バランスのとれた人 ⑩振り返りができる人

当然のこととはいえ、上述したグローバル人材の要件をよく満たしており、教育施策としての妥当性を担保している。

（初等・中等教育におけるグローバル教育は、現在の高校進学率が98%を越えることに鑑みれば、その年代の国民全てを対象にしていると言ってよく、グローバル教育の趣旨・内容は適切なものであっても、その適用限界については慎重な見極めが必要と思われるが、ここで紙幅を尽くすわけにはいかないので指摘をするに留めおきたい。）

既に指摘しているように、大正自由教育の根底には「子ども主体」、「個性重視」の考え方があつた。また、5において指摘したように、1917（大正6年）創立の成城小学校においては、「個性尊重の教育」、「自然と親しむ教育」、「心情の教育」、「科学的研究を基とする教育」の4つの教育方針が掲げられた。さらに4つの教育方針に関し、付されている解説によれば、「個性尊重」とは、いわゆる一般的で抽象的な個性尊重を意味するのではなく、一人ひとりに応じた具体的な学習であり、「自然と親しむ教育」とは、都会育ちのひ弱さを克服すべく「原始的生活」の反復による健全な心身の発達であり、また、「心情の教育」とは教員の子どもへの愛情と子どもの理解を前提とした感性の陶冶であり<sup>33</sup>、「科学的研究を基とする教育」とは、ダルトン・プランや多教材提供主義等の教育理論と実践の融合を述べているのである。

上述の「IBの学習者像」は逐一がその各趣意に相当するものではないが、個に応じた学習の提供は、上述の①、②、③を招来し、逞しい心身の形成なくして①～⑩の資質を獲得する営みは望めない。また、感性の教育は特に④、⑥、⑦、⑨に作用し、教員が理論と実践の両者を身につけることは、国際バカロレア教育の理念を理解し、学校という場で教育実践することに他ならない。

このように見てくると、大正自由教育は、当時の比較的富裕な家庭の子弟だけが通える私立学校において実践可能であるといった批判に晒され、行き過ぎた教科書中心主義の背後にある時代の大きな流れに呑まれて姿を消したかに見えたが、伏流水となって脈々と流れ、時代、時代のフィルターにより濾過されながら時を得て、グローバル教育という新しい流れとなって現代に湧出していると言えるのではないだろうか。

## 8 おわりに

冒頭に記したとおり、わが国の教育がひとつの転換期を迎えていることは誰もが認めるところであろう。そうした今日においてさらには今後の教育を考える上で、大正自由教育に着目し、その意義を考えるというのが本稿の意図する所であつた。

大正自由教育の先駆けとしての成蹊の教育、さらには、大正自由教育において澤柳政太郎の果たした役割、とりわけ成城小学校での「実験的」な教育活動から、われわれは、時代を先取りした注目すべき内容を随所に窺うことができるのである。

また、澤柳の下で活躍した赤井米吉と小原國芳がその後において果たした役割、とりわけ小原の提示した「全人教育」という理念は、澤柳の目指した教育そのものでもあり、大正自由教育の精華に含まれる理念と考えてもよいであろう。

ところで、7においても指摘したように、グローバル教育が時代のキーワードになっている感がある。グローバル教育即英語力といった風潮も否めない昨今、求められているのは僅かな英会話力の向上というようなことではありえない。イエール大学で学び、また同

大学で教鞭をとった斎藤淳が述べるように、これからの時代を開く教育は、いわゆる文系、理系というような枠組みをこえた幅広い教養を根底に置く学びであり、自ら考え、発信できる力を身につけるための学びであろう<sup>34</sup>。

幅広い教養、自ら考え、発信できる力を身につけるための学びに関連し国際バカロレアに注目したい。国際バカロレアについては、国際バカロレア試験官を長く務めた田口雅子は、国際バカロレアの目指すところは全人教育であるとし、以下のように述べている。

「この国際バカロレアの大きな特徴は「全人教育」というところにあります。この「全人教育」とは、この世界を豊かなものにしていくさまざまな文化とその担い方を尊重し、人と人とを結びつけている普遍的な人間性を共有し意識する人間に生徒を育てるということ、つまり地球市民としての自覚をもち、豊かな知識・優れた見識のあるバランスのとれた人間を育成するということです。」<sup>35</sup>

今後ますます重要になるのは、国際標準（基準）で教育を点検するという点にあると思われる。その際、参考にすべきものの代表は国際バカロレアではないだろうか。言語、文学を大切にしながらも、数学を必須とする必修6教科の学習、さらに6教科に加え、研究論文や社会奉仕等を含めながら、知識だけでなく、問題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力を重視する教育は、特色としての「全人教育」と併せ、今後の教育にとって大いに示唆に富むものであると思われる。

既述のとおり、大正自由教育は、欧米の新教育運動のわが国への波及が原動力となっている。さらに、欧米の新教育運動を生んだ背景に第一次世界大戦後の平和への希求があることも見逃せない点であった。ここで国際バカロレアの淵源について一言ふれておきたい。今日の国際バカロレアに結実する国際教育は、国際連盟本部がおかれたジュネーブにおいて1924年に設立された「ジュネーブ国際学校」に淵源をもつという指摘は誠に興味深いものがある<sup>36</sup>。

1920年に国際連盟が、さらに1921年にILO本部が開設されたジュネーブに、世界各地から赴任してきた職員の子どもたちを受け入れる学校として「ジュネーブ国際学校」が開設された。詳細は福田誠治の労作に譲るとして、ここでは以下の引用に止めたい。

「国際連盟は第一次世界大戦の反省から作られた組織であるが、同様の意識で1920年頃には国際新教育運動が開始されている。そのスローガンは、国家の子どもではなく、子どものための学校を目指すという「子ども中心主義」であった。ジュネーブ国際学校にもこの原理が貫徹していて、「学校の目的は、新教育運動の進歩主義教育原理に基づいた国際教育を提供することであった。」<sup>37</sup>

第一次世界大戦後の平和への希求が、欧米の新教育運動さらに大正自由教育を生み、さらには国際バカロレアを生み、その両者が、今日の教育にさらに今後の教育に示唆を与えているというのは牽強附会であろうか。

国際教育という観点で、澤柳政太郎のもうひとつの活躍にもふれておきたい。澤柳は個

性尊重を含む今日教育理念を掲げたのみならず、わが国の英語教育の改革にも多大な貢献を果たしている。いわゆる「オーラル・メソッド」あるいは「オーラル・アプローチ」をわが国にもたらすことになるハロルド・パーマーの日本招聘の立役者としての役割である<sup>38</sup>。澤柳は、英語教育においても、今日のみならず今後においても重要なあり方と考えられる内容を先取りしているのである。

本稿においては、大正自由教育が成立した歴史的背景、さらにはヘルバルト派教育学特に五段階教授法の限界との対比の中で生まれた生徒主体の学びとしての大正自由教育、中でもその中心的役割を果たした澤柳政太郎の生涯及び成城小学校での取り組み等を中心に、大正自由教育について考察してきた。

大正自由教育に関し、本稿でふれることができたことは限られてはいるものの、その考察をとおし、ひとつの転換期を迎えているわが国の教育に対していくつかの示唆を得ることができたように思う。それは、生徒主体の学びであり、全人的な教育であり、海外の学びをも積極的に取り入れる姿勢であり、教育と研究の双方に意欲的に取り組む教師の態度であった。

もとより、本稿は大正自由教育の全てを是とする立場をとるものではない。本稿で取り上げた私立学校は学費が高く、その恩恵に浴することができたのは一部の者に限られていたこと、そうした学校において、本来の児童中心的教育を追求するだけでは立ち行かなくなり、上級学校への進学実績をも睨みながら教育活動を展開せざるを得なくなったことなどは、その具体例であろう。

しかしながら、ともすれば、教育そのものが効率優先、目先の成果優先に陥りがちな昨今において、また、長期的展望と確かな理念に基づいた教育改革が必ずしも行われていない近年のわが国の教育をめぐる動き等を見るとき、加えて、教師のあり方が問われる中で、今一度大正自由教育に光を当てる価値は十分にあると思われるのである。

## 引用ならびに参考文献

1. ヘルバルトの果たした役割については、もとより四段階教授法に尽きるものではない。教育学の体系化に大きな業績をあげていることは周知のとおりである。

またヘルバルトとヘルバルト派（あるいはヘルバルト学派）は明確に分けられることも当然のこととは言え指摘しておきたい。なお、この点については、例えば以下を参照されたい。

石村華代 軽部勝一郎編著（2013）『教育の歴史と思想』ミネルヴァ書房 pp. 55-58。特にpp. 57-58の「ヘルバルト教育思想に対する誤解とその見直し」は、ヘルバルトの果たした役割を高く評価したものとして参考にしたい。

2. 明治20年代を中心にわが国においては、ヘルバルト派教育学についての翻訳書、著書が数多く出版されている。数多くの出版物のほとんどが実的分野を重視している点に特徴があった。この点について、以下の指摘をあげておきたい。

「このようにヘルバルト派の中でも、実際教育に特色をもつ学者の、その中でも実地的な著書が多く紹介せられたのであるから、ヘルバルト派教育学は、従来の外来教育学が少数の教育学者、教師に思想的に受容されただけであったのとは全くその状況を一変して、実際教育界に教授法の改革という具体的な内容をもって大きな影響を与えたのである。」 長田新監修（1961）『日本教育史』 御茶の水書房 p. 209

3. 長田新 前掲書 p. 211

4. 同書 p. 214

5. 佐藤尚子他著（2012 新版）『新版 はじめて学ぶ教育の原理』 学文社 p. 36

6. 形式化、画一化に関しては、以下の指摘のように、教授法という要因だけではなく、当時の小学校を取り巻く情勢も関係している。

1900年の小学校令で授業料徴収が廃止され（ただし、実際は完全に無償には至っていない）、その頃、就学率も90%を越えた。さらに、1907年には義務教育の年限が4年から6年に延長されている。以下は、そうした背景を踏まえての指摘である。

「ところが、小学校が普及すると、今度は教員の絶対数が不足するようになり、教員としての訓練を受けていない無資格の代用教員が教壇に立つことも珍しくなくなった。あわせて、一学級六〇名以上の児童を収容する過大学級、複数の学年の児童で一学級を構成する複式学級が導入されることも多かった。それらの結果として、教育方法は教員による一方的な統制や形式的な知識の注入に陥るようになった」 小針誠（2015）『<お受験>の歴史学』 講談社 p. 64

上記の『<お受験>の歴史学』は、私立小学校を中心に据えながら、私立小学校の誕生と歴史の変遷、社会との関わり、公立小学校との対比、今後の展望をも記した労作である。

7. 樋口勘次郎が果たした役割については、以下の点を指摘しておきたい。

「高等師範学校附属小学校訓導樋口勘次郎は、「統合主義的新教育法」（1899年4月）などを著し、ヘルバルト派教育学の「管理」が教師に対する「盲目的な服従」を強いることおよび注入教授を批判した。そして、子どもを教育の客体ではなく、自発的に学習を推進する主体として位置づける「活動主義」の教育を唱え、海外で雄飛する活動的な人間の育成をめざしたのであった。」

寄田啓夫・山中芳和編著（2002）『日本の教育の歴史と思想』 ミネルヴァ書房 p. 106

また、京都帝国大学教授谷本富は、以下のような役割を果たしている。

「従前のヘルバルト派の注入主義教授を批判し、児童が自ら学ぶことこそ大切であるとの立場から、「自学補導」を唱えた。そして欧米の国民に負けない「独立自尊」の精神をもった人間の育成をめざしたのである。」(寄田・山中 前掲書 p. 206)

ただし、谷本については、以下のように、当初ヘルバルト派の信奉者であったことも指摘しておきたい。

「明治20年代、ハウスクネヒトの薫陶を受け、ヘルバルト派教育学の紹介に努めたヘルバルト主義者であった」(同書 p. 106)

8. 梅根悟監修 (1976)『世界教育史体系13 イタリア・スイス教育史』 p. 65

9. ヴィットリーノ及びヒューマニズム教育については以下を参照されたい。

川井陽一 (2012)「ヒューマニズム教育とその今日的意義 - 言語並びに古典重視による人間形成の可能性-」(北里大学一般教育研究紀要第17号)

川井陽一 (2012)「ヒューマニズム教育にみられる道徳的価値-ヴィットリーノ・ダ・フェルトレの教育から学ぶもの-」(北里大学一般教育研究紀要第17号)

なお、ヴィットリーノと同様、寄宿学校という制度の下で、知、徳、体の調和的発達を目指す全人教育に取り組んだグアリーの学校の実際は以下のとおりである。

「グアリーノ自身、生徒たちに取り巻かれて田園を散歩したさまを叙述している。生徒たちは、群れつどうむく鳥か雲霞なすいなごのように、かれの回りを駆けまわっていた。そうした彼を妻がたすけ、やがて息子たちや他の協力者たちがたすけていた。その環境は暖かい愛情に満ち、愉快で家庭的だったにちがいない。グアリーノは、暖かい友愛の雰囲気の中であたわむれるのが好きだった。「寄宿生」たちは「協同者」だった。グアリーノは一度ある友人に書き送ったことがある。「小鳥や小さな動物を仕込むことにひどく熱心な人たちがいるものです。それなのに私たちは、すぐれた資質をもつ子どもたちの教養を気につけ、いわば人びとの人間性に意を用いるよう、努めなくてもいいものではないか」

学生たちと教師とは共同生活をしてきた。そしてグアリーノがちょっと校長格というにすぎなかった。「家も食卓も書齋も共通」だった。「寄宿学校」には、共に学び共に働こうとする協同精神がみなぎっていた。そこでは身体の鍛錬と知的活動がほとんど自然に調和するように思われた。道徳教育は真剣できびしかったが、けっして苛酷

ではなかった。そして学習と一体をなして規律正しく、だが強制なしに行われた。」

エウジェニオ・ガレン著 近藤恒一訳 (1974) 『ヨーロッパの教育』 サイマル出版会 pp. 140-141

ここにみられるのは、豊かな自然のもとでの温かな師弟の交流であり、同時に知、徳、体の調和的発達を目指す全人教育の実践である。ヴィットリーノの教育及びグアリーノの教育、そして二人の教育者としての姿勢を見ると、本文中に引用した以下の文章が正鵠を射ていることが理解されるはずである。

「十九世紀末から二十世紀初めにかけてフランスのドラモンやドイツのリーツがさきかけて試みたもの、ドイツでは、ラント・エルチーフングス・ハイム（田園教育舎）と呼ばれたもの、それを範として日本でも今井恒郎によって東京郊外の和田堀に設けられた日本済美学校や中村春二によって創立された成蹊実務学校の教育とほとんど同じ趣のものである。

……ヴィットリーノはそれより五〇〇年前に、これらとほとんどそっくりそのままの新学校を創造していたのである」

ヴィットリーノの教育及びグアリーノの教育、そして二人の教育者としての姿勢は、後世に影響を与えたのみならず、今日なお参考にすべき内容を含んでおり、今後の教育を考える上でもわれわれに多くの示唆を与えてくれる内容となっている。

10. 中野光 (2011) 『大正自由教育研究の軌跡』 学文社 p. 188
11. 中野光 前掲書 pp. 189-190
12. 同書 p. 194
13. 同書 p. 196
14. 同書 p. 198
15. 米山 弘編著 (2001) 『教師論』 玉川大学出版部 p. 94
16. 澤柳が理論と実践を兼ね備えた実験学校を目指した成城小学校においては、『成城小学校研究叢書』、『教育問題研究』等が発行され、実践を踏まえた研究成果が積み上げられるとともに、積極的な発信が行われていた。
17. 南日本新聞社編 (1977) 『教育とわが生涯 小原國芳』 玉川大学出版部 p. 161  
なお、同書には続いて、以下の記述がある。「成城小の創設こそが、澤柳の生涯の悲願であった。そして、その新教育の旗印は、官学の画一教育、進学準備教育、詰め込み主義、形式主義への反旗であった」(同書 p. 161)
18. 『澤柳政太郎』 (2006) 新田義之 ミネルヴァ書房 p. 190
19. 中野光 前掲書 p. 27

1895年（明治28年）、群馬県立前橋中学校校長であった澤柳は、『教育者の精神』という小冊子を著し、その中で、ペスタロッチについて、「教育者皆ペスタロッチたるを



得べし」と説いたという。(同書 p. 27)

20. 南日本新聞社編 前掲書 p. 161
21. 同書 p. 31
22. 同書 p. 31
23. 初期成城小学校の新たな試みと、目ざましい成果については以下を参照されたい。  
新田義之 前掲書 pp. 208-216
24. 赤井米吉は、ダルトン・プランの紹介本の翻訳発刊、また、ダルトン・プランの生みの親であるパーカーストの『Education on the Dalton Plan』の部分訳を『児童大学の発祥』と題し、成城小学校の『教育問題研究』に発表するなど、ダルトン・プランをわが国へ紹介する上で貢献しており、また、同プランの成城小学校への導入に尽力している。新田義之 前掲書 pp. 257-258  
なお、念のため申し添えれば、「児童大学」は、パーカーストがニューヨークに設立した私立小学校を指している。
25. 主事は現在の教頭の立場に近いと思われるが、小原の活躍は目ざましいものがあった。「(澤柳が多忙なこともあり：筆者注)、従って実際に教育現場を率いて毎日の研究と実践を牽引していくのは主事であって、成城小学校の主事は、事実上校長以上に重要な責務を担っていたのである」 新田義之 前掲書p. 217

付言すれば、小原は、澤柳の外遊中に、校長代理の立場で澤柳に傾倒していた赤井米吉を成城小学校に招聘している。新田義之 前掲書p. 257

26. 中野光 前掲書 p. 152
27. 同書 p. 152
28. 中野光は、赤井米吉と彼の明星学園における実践について以下のように描写している。  
「ですから、私立学校は閉鎖的であってはいけない。ひとりよがりであってはいけない。実践と研究をとおして公教育全体を改革していく力を持たないといけない。したがって教員は教師であると同時に研究者でなければならない。そこに教師としての喜びを感じとるべきだ。これが澤柳精神でした。  
赤井米吉・照井猪一郎の両先生も、そのことをもって明星の理想とされたのだと思います。」 中野光 前掲書 p. 150
29. 小原國芳 (2010 改版) 『全人教育論』 玉川大学出版部 p. 10
30. 同書 p. 12
31. 同書 p. 114
32. 南日本新聞社編 前掲書 pp. 153-154
33. 4つの教育方針のひとつ「心情の教育」について、中野光の解釈を追加して記しておきたい。

「今日の言葉で言えば、感性の教育。たとえば美術とか音楽、あるいは自然の教育と結びつくけど、“sense of wonder”、感性を育てる教育。“美”を恋うる心。そして自然と芸術にきたえられていく。そういう自然や芸術との関係におけるゆたかな人間教育こそ、これからの教育に必要ではないか。」中野光 前掲書 p. 149

34. 齊藤淳は、自身が学びまた助教授として学生を指導したイエール大学での経験を踏まえながら、教養教育の重要性、主体的な学びをとおしての学ぶことの喜びを強く訴えている。

齊藤淳 (2014) 『10歳から身につく問い、考え、表現する力』 NHK出版

特に、同書中の「リベラルアーツとは」(pp. 34-37)、さらに、「イエールの教育哲学」(pp. 37-40) は、この点について大いに参考になる。

35. 田口雅子 (2007) 『国際バカロレア』 松柏社 p. 13
36. 福田誠治 (2015) 『国際バカロレアとこれからの大学入試改革』 pp. 46-86  
ジュネーブ国際学校の設立に始まり、国家を超えた共通の国際大学入試への取組が、1968年の国際バカロレア機構の創立につながり、その後の変遷を経て、今日の国際バカロレアに至る経緯が詳細に述べられている。

同書にある以下の指摘は今後の教育を考える上での貴重な問いかけである。  
「誰がなぜ国際バカロレアという仕組みを試みたのかという歴史を詳しく見ていこう。それを知ることは、日本はどこをなぜ変えなければならないかを考えることにつながり、かつ国際バカロレアに不足する点を見抜くことにもなる。」

福田誠治 同書 p. 44

37. 同書 p. 47
38. 新田義之 前掲書 pp. 234-236  
なお、澤柳自身の英語力の高さも特筆すべきものがある  
昭和2年ホノルルで行われた第2回太平洋問題研究会における英語演説を新田は以下のように述べている。

「澤柳の英語演説はすでに数回の国際会議において、事実分析的確さと明晰な論理性ばかりでなく、自己認識の率直さによって高く評価されてきた」同書 p. 288

## 参考資料

「7 大正自由教育とグローバル教育」に関する参考資料は以下のとおりである。

1. グローバル人材育成推進会議中間まとめ (平成23年6月)
2. 国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策 (平成23年6月 外

国語能力向上に関する検討会)

3. 「成長戦略実行計画（改革工程表）」（日本再生のための戦略に向けて）（平成23年8月閣議決定）
4. 「建学の精神」（成城学園）